



子どもたち先生方の笑顔のために

# 共に歩まん

壁面に掲示してご活用ください

令和5年6月7日発行

第8号

中信教育事務所

ご意見はこちら→



←過去の「共に歩まん」はこちら

「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実のためのポイント① 算数・数学編  
「知識及び技能の習得場面でも思考し、判断し、表現する」

つな  
げる

導入

展開

終末

単元：小数（3学年）

令和4年度 小谷村立小谷小学校の実践から



小数のたし算ができることをねらう場面だよ。小谷小の子供たちの様子を見てみよう。

○展開での追究場面～「個別最適な学び」を支える基盤について～



一人で黙々と取り組む姿や、自席を離れて友と意見交換をしている姿があるね。それぞれの学び方で、問題解決に向けて取り組んでいるよ。こうした学びの姿につながるポイントは何かな？



まずは

## ねらいの焦点化

子供にとって、問いが広すぎてしまうと活動はとまってしまう。ねらいを焦点化し、授業では子供にどこまで委ねることができるか構想をもちましょう。

そして

## 個に応じた支援

単元を通して学習内容が確実に定着するように個別の支援計画を立てましょう。

Point  
1

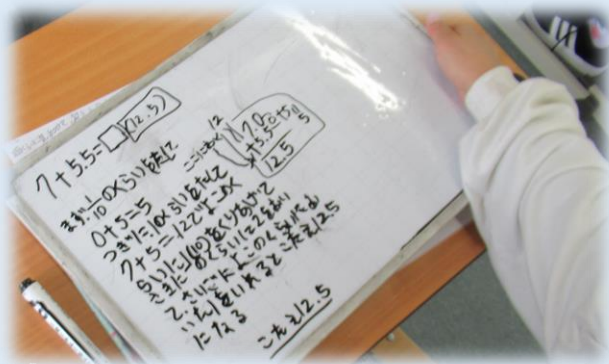
## 「なんでこの答えになるのか」に焦点を当てる

例えば  $7 + 5.5$  の計算では、答えを出すまでの過程を明らかにすることに焦点を当てていました。本時子供が考えたり、友と意見交換したりしたのは、「答えがいくつ」ではなく追究の過程でした。既習事項を基に、新たに出会った小数の加法の計算方法を自分なりに生み出していました。

Point  
2

## 「つまずき」や「分からない」を大切に、互いに考え方を学び合う場を設ける

黒板前には、「分からない」という子供が集まり、すでに自分なりの考えをもった友の説明を聞いていました。教師は場を設定する傍らで子供の説明を聞いたり、個別に支援を行ったりしていました。こうした個別の支援の際には、単元を通して子供のつまずきを捉えることが大切です。



算数・数学科の「個別最適な学び」のポイントは、「計算ができる」ことをねらった授業であっても、小谷小の子供たちのように小数の加法について、思考し、判断し、表現することを通して加法の意味について理解して、計算ができるようになることだね。小数の加法に限らず、追究の過程に焦点を当てたり、子供のつまずきに寄り添った支援をしたりすることが重要だね。

